

## 蕪村と伏見の仲間たち

藤田真一

### 一 名古屋の花客

花咲く京の都に、遠来の客人を迎えるとなれば、さてどこへ案内するのがよいか。今も昔も、思案のしどころだろう。ただでさえ目移りのする京の名所、しかも春ともなれば妙案もむずかしく、狐疑逡巡するのは必定。さりとて、電車もタクシーもない江戸時代に、遙かな遠出もためらわれる。そんな至難の案件のもと、一昼夜のうちに、郊外の花の名所を二ヶ所もこなした一行があった。

安永五年（一七七六）二月、蕪村たち京・夜半亭の連中は、名古屋から少々口うるさい俳客をもてなすはめになった。客人の名は、あやた暁台。尾張俳壇の雄である。かれは二年前の安永三年四月に上洛して、はじめて蕪村に対面、そして俳席をともにした。面晤めんごはそれ以来だったが、書面でのやりとりは続いていた。

互いにたいせつな俳友として遇していたようだ。

そしてこんど二年ぶりの再会となる。その暁台上洛の一報を、蕪村は手紙のなかで、弟子の几童きどうに通じた。その一節である。

暁台出京、早速四五日いぜん已前、愚老方へ尋来じんらいに預り候。其後その暁子も流行之風邪之由、旅宿へ来てくれよと呑涙とんぬいより細書にて候へども、いまだ我等も参りかね候。

二月二十一日という日付からすると、二月中旬ころには入洛していたようだ。京に着くや、すぐに蕪村宅を訪れたというところにも、両者の間柄の一端を知ることができる。しかし、風邪をひいた暁台の旅宿へ蕪村に來いと誘引するところなど、やや強引な面もうかがえる。蕪村はこれに応じようとしたが、事情によつて控えた旨が、以下の文面にみえる。

今日は相尋まうすべく可申と存候所、暁台も伏水ふしづみのもの、に行ゆくとやら伝承候故、さしひかへ申候。暁子右之風邪故、早速几童子へ

しらせて給り候様にと申<sup>ま</sup>来候。例之<sup>きたり</sup>丁寧家、懇情の人と存候。

この日、蕪村は晝台の客舎を訪問しようとしたところ、晝台たちが伏見へ桃の花見に行くらしいと聞いて、行くのをやめたというのだ。注目されるのは、「晝台も、伏水のもの、に行」という文言である。伏見行きは予定は、蕪村・晝台両者の偶然の一致か、晝台側の同調ということになる。桜の名所は数かずあるが、桃の花となると限られてくる。なかでも伏見は、「桃山」という地名があるほどに桃で知られていた。晝台が、名にし負う桃の名所に行つて見たいとした願望はよく理解できる。

このあとの文面は、几童子へのお誘いは、蕪村さんのほうから伝えてほしいと、晝台が希望したことを伝えている。晝台が、直接几童に誘いかけるのではなく、師たる蕪村を介していざなうという晝台の配慮を評して、「例之丁寧家、懇情の人」という言い方でまとめたのだろう。「例之」とは、蕪村・几童両者のあいだでは了解済みであることをしめす。

伏見はもとより歌枕として、和歌によまれてきた名所である。しかし、和歌において伏見の桃がうたわれることはなかった。そこには、江戸のはじめ、伏見城が毀<sup>こ</sup>れたのち、城跡に数知れぬ桃の木が植えられ、桃の花の名所となったといういきさつ

がある。安永九年刊『伏見鑑』の「桃山」の条にこう賞美される。

伏見の町の東に有。南北十町余り、東西三四町、或は五六町の間、数億万株の桃花、山野に充て<sup>み</sup>爛漫たり。異国はしらず、<sup>およそ</sup>凡日本のうちにかくのごとき桃花の多き所、又有べからず。吉野の桜多しといへども、此所のごとく数万株一所にむらがりあつまりたるはあらず。無双の絶景といふべしと、貝原篤信（益軒）もいへり。故に春は都鄙遠近の風客・騷人遊観せざる事あることなし。

同年刊の『都名所図会』にも、同趣の記述がみられる。安永九年（一七八〇）というと、まさに蕪村の生きた時代である。「都鄙遠近の風客・騷人」の遊観とは、そっくり蕪村・晝台一行を言いつつたような文辞になっている。

さて、晝台の不具合やもつてまわつた気遣いを乗り越えて、京の夜半門、名古屋の暮雨門の合同伏見ツアーは実現した。几童の句日記『丙申之句帖』（几童句稿）の配列からすると、二月二十四日前後と判断される。問題は、この日付で花の盛りに出会えたかということだ。陰暦で安永五年二月二十四日は、太陽暦にすると、四月十二日にあたる（『日本暦日原典』）。ならば、ちょうど桃の花見どきといつてよい。

『暁台句集』（文化六年成）につきのよな一句がみられる。

ふし見

桃つらく花尽る処水長し

本句がこのときの作かどうか確証はないが、伏見のことを、あたかも桃源の郷であるかのようにうたったよみぶりである。

いっしょに出かけた几董も、ここでよんだ句を『丙申之句帖』に録した。

暮雨巷と伏見の桃山に遊ぶ

桃おちこち花のうらうへ入日さす

「うらうへ」とは、裏と表の意。あたり一面の桃の花びらの表面に、春の入り日が照り映えるだけでなく、裏のほうにもさしている、というもの。あるいは、夕日が花びらを透かしてみえるともとれる。東山連山の南端に位置する桃の山は、西日をおびていっそう美しく輝いている。ときは夕刻、まる一日を桃樹の下で遊んだのだろうか。しかし、この日の遊山はこれで尽きたわけではなかった。

『丙申之句帖』には、これに続けて、直後にさらにつきの一句が見られる。

嵐山の禁にやどりて、曙河辺を吟行す

星影の花にしみ入夜明かな

夜空が白んでくるとともに、星の光がしみこんだかのように

花が浮き上がってくるというのだが、まるで夢見る乙女がつくったかのようなロマンチックな句である。花はむろん桜である。嵐山は、ことに江戸時代になって、京都西郊随一の桜の名所と謳われた。

几董ら一行は、伏見に花見に行ったその足でこの地にやってきた。夕暮れ伏見にいて、そのまま嵐山をめざして歩いたということである。京都の東南の地から西北の地へと、一晚かけて歩いたにちがいない。それを証明するのが、つぎの蕪村の句である。

暁台が伏水、嵯峨に遊べるに伴ひて

夜桃林を出てあかつき嵯峨の桜人

夜つびて東から西へと歩いたことは、この句そのものが語っている。前書によると、この遊行に積極的だったのは、暁台だったようだ。病み上がりということを考慮すると、花見遊山への貪欲さがいっそう際だってみえる。

## 二 海宝寺と下村家

それから三年後の安永八年十二月十六日、蕪村は几董に宛て

は手紙(推定)の冒頭、いきなりこんなことを書きつけた。

此間は海ほう寺、御うら山しく、しかし帰宅、夜に入候と奉存候。

海宝寺は、墨染にある禅宗黄檗派の寺院で、山号を「福聚山」と称す。享保年間の創建だが、万福寺十三世竺庵じくあんのときに寺域が整備された。その寺について、うらやましいと洩らしているのはどういふことか。じつは海宝寺は、黄檗寺院の常として、普茶料理を供していた。旨い物には目のない蕪村のこと、当寺の名物料理を楽しんだ几童に羨望の念をいだくことは大いにありうる。しかし、帰宅が夜中に及んだようで、それなら自分には無理だったなと言いついて聞かせているようでもある。

この海宝寺については、別の手紙でもふれている。三月三日という日付のある手紙で、宛先は賀瑞、年代は不明ながら、安永五年ころものとされる(賀瑞については後述)。

桃花之節は海宝寺へ参候。同伴あまた有之候。どふぞ其節御申上度候。

あこがれた海宝寺に蕪村もたしかに行っていた。ここでは、桃花の時節にあわせて行くというもの。しかも大挙して、仲間を誘い合わせて参上するとも言っている。物言いかすると、一度ならず足を運び、よほど馴染みだったことが想像される。

海宝寺の(味)は重々知り尽くしていたにちがいない。

ところで、この海宝寺はまた、呉服屋「大丸」ゆかりの寺として知られていた。大丸の「業祖」といわれる下村彦右衛門正啓は、若いころより黄檗に参禅し、とくに海宝寺に隠栖した竺庵に心服することはなほ篤かった。正啓の小松谷の別業山荘にもたびたび竺庵を招いたといわれる。荒廃していた海宝寺の堂宇を復興するのに寄与したのも、正啓であった。下村家以外の檀家もなく、また末寺も持たない無本のこの寺は、まさに「大丸のお寺」と称されるにふさわしい(『大丸二百五拾年史』)。

問題は、大丸ゆかりのこの寺に、蕪村たちが出入りするようになった事情である。金福寺のような俳諧にゆかりのある寺でもなければ、蕪村が黄檗宗に信心を寄せたという痕跡もない。考えられるのは、人脈である。

几童の安永五年版『初懐紙』のなかに、「春の夜の闇を名乗や梅花」という発句があり、作者は正白しょうはくとある。夜半亭の撰集類にはじめて見る名である。安永二年の『あけ鳥』にはまだ見えないが、安永五年刊の『写経社集』や『統明鳥』では入集している。句会では、安永四年四月十二日の夜半亭月並句会の出座が最初のものとして確認できる(『月並発句帖』)。以後、毎回というほどではないが、時どき顔を見せているので、蕪村の門弟

として遇されていたのはまちがいない。その後、「昨非」という別号（庵号）で出ることもあったが、天明二年ころには「正巴」と改号したことが知られている（下村をさむ『春坡の資料と研究』所収「蕪村門俳人正巴について」。以下「正巴」とする）。

この正巴は、本名を下村三七郎といい、業祖正啓を父にもつ。つまり大丸の創業者の実子という立場にあった。そういう人物が蕪村門にあったことからすると、蕪村と海宝寺の距離もぐつと近くなってくる。ただ、どういう契機があつて、正巴が夜半亭一門に加わるようになったのかは不明である。几董が橋渡し役だったのは疑いないだろうが……。

蕪村の愛弟子几董の句稿をたどると、関連する記事や発句が散見する。そのいくつかを掲出してみる。作者はすべて几董。

海宝禅寺にやどりて

春の夜や寒さに耐る松の月

〔晋明集二稿〕安永七年春

春の夜寒に震えているのは、松にかかる春月であると同時に、寺に一宿した当人でもあつたようだ。参禅のためではなく、いづれ遊宴の折の宿りだったと想像される。つぎの句がそのことを示唆する。

海宝禅寺の後苑に遊ぶ

鶯のうしろ影見し冬至哉

〔晋明集二稿〕天明三年以前

右の二句では、寺での過ごし方はわからず、句会に専心したかにもみえる。だが、つぎの二例をみると、そうとも断定できない。

正月十八日、遊海宝禅寺附茶

もろこしの酢加減きかむ梅花

〔晋明集四稿〕天明八年一月十八日

廿四日、伏水海宝禅寺附茶、冬至日

老僧に耐ゆるされぬ冬至梅

〔晋明集四稿〕天明八年十一月二十四日

前書にみえる「附茶」は、普茶料理のこと、寺の名物料理を前にして、句会をやっていたさまが彷彿とする。翌寛政元年の夏至にもこの寺に遊んだが、このときは「附茶」とのみあつて、句作のことはしるされていない。冬至の日はとくに、禅宗寺院では休日とし、民間を饗応する慣わしがあつた。あるいは、夏至にも似た風習があつたのだろうか。こうした事例を勘案すると、蕪村の訪問も句会と会食一体のものであったと考えてよい。几董の『晋明集第二稿』のなかにも、この寺との深い関係を思わせる作品が見える。

几童句稿には、正巴もしくは下村家との関連をうかがわせる記事がほかにも点在する。『晋明集二稿』（天明八三年以前）には、正啓と竺庵にゆかりの、東山にある「小松谷下村氏別荘」を几童が訪ねてよんだ句がしるされている。あるいは、「伏水下村氏の後苑に遊ぶ」という記事は、本拠伏見の下村邸に遊んだときのものとおもわれる。下村氏はまた岡崎にも屋敷を持っていて、几童の度重なる訪問が記録される。とくに安永七年四月初ころからは、「史記」の読書会のために、岡崎の正巴邸をしばしば訪れている（『戊戌之句帖』）。こうなると、もはや並の一弟子というには余りある深い関係といわざるをえない。

几童の居宅は、樫木町通にあつた。一方、正巴が営む小紅屋の店は、几童宅から四つ北に上がった上長者町角にあつた。いずれも御所のすぐ東で、その間数百メートルの距離にあり、ご近所といつてもいい場所柄である。几童が岡崎に足を運ぶことがあるかと思えば、逆に正巴のほうから、几童の自宅を訪ねてくることも稀でなかつた。たしかに両者の往来は頻繁だつた。そんな近所付き合ひともいふべき交際が、なんらかのきつかけによつて、正巴を俳諧の道に誘うことになつたともみられる。

夜半門の面々と大丸一族との関係はこれにとどまらない。正巴の甥である春坡の名が、そのうち夜半亭の撰集に見られるよ

うになる。本名を下村兼邦、別号を「遅日亭」などと称した。春坡がはじめて登場したのは、天明二年の几童『初懐紙』だつた（『春坡の資料と研究』）。この前年の安永十年（天明元年）ころに、几童の春夜樓に入門したものと考えられる。入門にあつては、叔父正巴の手引きがあつたものと想像される<sup>1</sup>。

本業としては、一時紅染業を営み、のち柳馬場下村家の家祖となる。本人が蕪村・几童に入門するだけでなく、妻子も含めて、家族ぐるみで俳諧に遊んだようだ。天明四年刊の『桃のしづく』には、正巴を筆頭に、春坡・松化・まさ女・米松の名が列して入集する。そのうち、まさ女は春坡の妻、米松は七歳の子息、また松化も一族の一人と推定されている。その後、いくつかの撰集を編集し、さらに几童の句集『井華集』の刊行にも多大の寄与をした（跋文）。春坡は、夜半亭（蕪村・几童）のたんなる弟子にとどまらず、几童の俳諧活動にもなくてはならない存在となつていった。

俳諧の師弟関係というのは、句会や句作のレベルを超えて、日常の付き合ひにもおよび。春坡に宛てた手紙を見ると、蕪村は春坡の求めて扇面に揮毫したり、折々馳走にあずかつたりすることがあつた。また、蕪村が美濃のひとから依頼されていた文台を、春坡の仲介で職人に制作してもらうとか、茶碗台を恵

与されることがあった。また、いっしょに芝居見物を楽しむこともあった。もちろん春坡が招待したのでろう。

伏見から発して、京都に本店をもち、江戸・名古屋・大坂に商売を展開していた大商人大丸の一族と、中興俳諧の雄蕪村や弟子几童の夜半亭一門が、さまざまなレベルで密接な関係をもっていたという事実は注目すべきことである。文学史に大きな足跡を残した俳人の活動と、現代を代表する企業の創業家の雅遊が、背中合わせのように一体となっていたようすが鮮明に浮かび上がってくる。

### 三 龍草廬と夜半門

この時期の京都で、もっともはやった漢詩人といえは、まず龍草廬りゅうそうろうに指を屈する。龍草廬は、正徳四年（一七一四）、伏見に生まれる。生家は、御香宮ごこうぐうの前だったという。宇野明霞に儒学を学び、寛延三年（一七五〇）、彦根藩に文学の儒官として出仕する。安永四年（一七七五）致仕、以後は洛中に居住し、詩社「幽蘭社」を営み、多数の詩友・門人を擁して、詩文の活動をもつぱらとする。漢詩文のみならず、また和歌や書にも秀でていた。草廬は、近世の伏見が生んだ代表的な文人ということ

ができる。

このひとと蕪村門との関わりも生半可なものではなかった。蕪村が夜半亭を襲名する前後、友人として、また門弟として、蕪村とつねに俳席をともした、召波しゅうは（黒柳氏）という人物がいた。かれは、父祖の代からつづく京の名士の家柄で、一門人の域をこえて、蕪村および夜半亭の活動にとって不可欠の存在だった。注意すべきは、かれがもと、世に認められたかなりの漢詩人だったことである。明和五年版『平安人物志』『学者』の部に、「柳宏りゅうこう」として、一流の詩人たちに伍して掲げられている。また、安永八年版の『日本詩選続編』にも名がみえる。かれは上京かきょう（中立売猪熊）に住まいする、れっきとした京都人だが、青年のころ、江戸に出て、服部南郭の門にあって学問・詩作に励んだ。帰洛後は、龍草廬の幽蘭社中に同人として加わり、詩人柳宏もしくは柳廷遠の名で詩作を発表し、『金蘭詩集』『友詩』『日本詩選』などの漢詩集に名を列する。

たんに草廬社中の一員として、詩をよんでいたにとどまらない。家集『草廬集』のなかには、両者の個人的交遊をしのばせる草廬の自作も収録されている。たとえば、初編（宝暦三年序）には、「秋日柳廷遠とと同二鴨水ノ西楼ニ遊ブ」と題する五言律詩が見られる。また、二編（宝曆十二年刊）には、「春日柳廷遠下

同二舟ヲ大堰川ニ泛<sup>うか</sup>ブ」と題する七言律詩が収められている。いずれの詩にも、河畔あるいは河上にて、酒杯を手にしつつ、遊樂をともにするさまがよまれている。おそらく、これらの歓樂は召波によるもてなしだったと想像されるが、柳廷遠(召波)という特定の名を挙げているところからも、草廬との個人的な深い交遊ぶりが見えてくる。

そんな実力と地位を手にした詩人が、いつしか俳諧に目覚め、のめりこむほどになる。そして、明和三年に始まった三葉社句会にも熱心に参加し、明和七年、蕪村が夜半亭を襲名する下支えとなる。ところがその翌年暮れ、志半ばにして、四十五歳で急逝する。とはいえ、七回忌にあたる安永六年には、遺句集『春泥句集』が上梓され、九百あまりの発句を見ることができ、生前の精進ぶりをうかがわせるに足る成果といえる。

その『春泥句集』に、蕪村は長文の序文を寄せた。そのなかで、召波と交わした俳諧問答がある。「離俗論」の名でよく知られている。その問答において、離俗の捷徑があるかと尋ねられたとき、蕪村は「詩を語るべし。子もとより詩を能<sup>たく</sup>す」と答えた。これは召波の経歴を見据えてなされた発言だった。江戸に遊学し、帰洛後も草廬社中で詩作活動した召波ならではの、相手をわきまえた訓辞ということができる。

龍草廬に親炙した蕪村門人は、ひとり召波だけではなく、若手の弟子几董も草廬と深い関わりをもった。「几董句稿」の安永二年六月のところに、つぎのような記事がみえる。

亀城の儒草廬先生に相見せし時、挨拶  
ことの葉も涼しき松の木かげ哉

「亀城」は、彦根城の別称「金亀城」のこと、まだ彦根藩に仕官していた草廬に相まみえた際の発句である。このとき草廬は彦根ではなく、京都にいたものと想像される。「相見」とはたんなる面会ではなく、師弟の契りを結んだことを意味する。

安永五年の二月にも、草廬にまつわる記事がみられる。「題草廬先生平安四時歌」と前書して、春夏秋冬の五言絶句を掲げ、各季節の詩のあとに几董が発句をよんだものである。一例として、春の作を掲げる(読み下しは私読)。

信美此山川　まことに美なるかなこの山川

帝州春可憐　帝州、春憐れむべし

繽紛花柳色　繽紛たる花柳の色は

都与五雲連　すべて五雲と連なる

みやこ辺や柳に見こす花の雲

右 春

以下、夏・秋・冬とつづいて、四組の漢詩と発句が揃う。こ



これらの五言絶句はすべて、『草廬集』初編に収録されるものであり、「相見」から三年後のことだが、几董の学習の一事でもあり、また草廬に対する敬愛の念の頭れともいえる。

几董は句作の栄養源として詩を勉強していたにとどまらず、みずから詩作にふけることもあった。「几董句稿」の同じ安永五年三月から四月にかけて、漢詩が四首書きつけられている。七言絶句が一首、五言絶句が三首。そのうちの一首はこんな詩である。

送友人帰浪華

今夜到伏水 今夜伏水に到り

明朝直帰郷 明朝ただちに帰郷す

舟中作何夢 舟中、何の夢をかなす

惜別断我腸 惜別、わが腸を断つ

絶句としては平仄が合っておらず、また伏見から舟に乗って帰坂する友人がだれなのかわからない。完成度が高いとはいえず、ひよっとして架空の出来事をよんだとも考えられる。だが、これが蕪村の「澗河歌」(安永六年『夜半楽』所収)を誘引した可能性が存するとなると、みずみず看過することもなるまい。名品「澗河歌」の全作引用は控えるが、男が舟で淀川を下り、女のもとを去って行くこうとする場面を、女性の立場でよん

だ作品である。絶句まがいの漢詩と、仮名の歌を織り交ぜた特異な形態をもっている。

蕪村にはまた、「遊伏見百花楼送帰浪花人代妓」(伏見百花楼に遊びて浪花に帰る人を送る、妓に代わりて)と題する、別ヴァージョンの自筆扇面自画賛が残されている。詩句の一部を異にするが、ほとんど同内容の作品である。扇面の制作時期は不明ながら、およそその時期のものと考えられている。こうしてみると、作品の成熟度や趣向の高等性では、比較にならない出来映えながら、創作の場や制作年代に共通性が認められる。

「澗河歌」の背景はこれに終わらない。『草廬集』初編には、「漢水歌 送生駒山人泛舟南帰」(漢水歌 生駒山人が舟に泛んで南に帰るを送る)という七言古詩が収められている。生駒山人は日下世傑といい、草廬の友人である。そのひとが京から大坂に舟で帰るときによんだ送別詩で、そこには特筆すべき趣向性はない。だが、この漢詩から、かなり手の込んだ趣向やひねりを加えてなったものが、蕪村の「澗河歌」だったと想定することは困難ではない。同じ『夜半楽』において発表された、畢生の名作「春風馬堤曲」の表現においても、草廬の漢詩との関連性を指摘することもでき、俳壇・詩壇を巻き込んだ京文壇という大きな枠組みのなかに、蕪村たちの創作活動があったこと

になる（「春風馬埭曲」については、五章で言及する）。

蕪村と草廬との個人的な付き合いは確認されていないが、蕪村追悼集『から檜葉』（天明四年一月跋）には、草廬による手向けの発句（漢詩ではなく）が寄せられた。

蕪村翁をいたみて

をれけるか千代をうそなる雪の松 草廬

几童からの依頼に応えた句作だったかもしれないが、まったく無縁のひとを追悼するとは思われない。生前の交際の一端を証する追悼句と考えられる。草廬の真情から出たものとして差し支えないだろう。

#### 四 蕪村の発句評点帖

二〇〇七年秋、木津川市にある京都府立南山城郷土資料館（ふるさとミュージアム山城）で、「南山城の俳諧——芭蕉・蕪村・楞良——」と題する展覧会が催された。展示の目玉のひとつに、新出の蕪村資料があった。それは蕪村自筆の点帖で、「月並発句合」と題されていた。

点帖とは、よまれた発句もしくは連句に対して、点や批評を加えたものをいう。評価する者を点者と称し、宗匠の資格をも

つものによってなされる。点は、鉤状かぎのしるしと、宗匠独自の印判を組み合わせて用い、さらに処々に点者自筆の批言が書き加えられる。懐紙様のものや卷子、また冊子形態のものがあるが、本書は冊子に綴じられている。表題や内題はなく、わずかに末尾の名寄せに「月並発句合」とあるのみである。これをもって仮題としているが、後述するように、かならずしも実態を反映したものとはいえない。

発句総数は百三十六、三十四句ずつ四季に分類されている。各季節の兼題は、「春雨・夏木立・秋の蝶・冬籠」の四題である。本文の筆者は不明、作者名も基本的に記入されない（作者名が記載されているのは、高点を得た者のみ）。この催しに参加した作者名は末尾に一覧されるが、本文とは別筆で、おそらく全作業を完了してから、まとめて記入したものと推測される。

ここで、どのようなかたちで点を付け、評価を下しているのか、いくつか実例をあげておく。まず、高い評価をもらった例である。

古寺や瓦も落て春の雨

句頭に鉤印の点を三点、一点は朱で書かれている。これも蕪村の手蹟と思われる。そのうえでさらに、「路傍堇」という薄緑色の印が捺されている。これは、芭蕉の「道のべの木槿は馬に

くはれけり」という句に基づく点印で、十点をあらわす。蕪村はほかに、「春盡鳥啼」「明月照池上流光正徘徊」、それに三尾の魚などの点印を用いているが、いずれも芭蕉の発句に取材したものである。本点帖には、「春盡鳥啼」と魚三尾までが使用され、十五点をあらわす。本句帖のなかでは最高得点である。

右の句にはさらに、「しぐれよりは、春雨のかた感ある心地す」という批言が、蕪村の手で書きつけられている。屋根がこぼたれて、あちこちの瓦が落ちていくような寂れた古寺の屋根に、春雨がやわらかく降り注ぐさまをよんだ句だが、この景色には春雨がふさわしく、かりに時雨をもつてくるよりははずつとよいと述べたものである。春雨の句として、ぴつたりはまつていると評価したのだ。

一方、同じ春雨の句でも、こんな事例もあった。

#### 春雨や心に歩む花の旅

評語は、「ちと古くさし」とある。陳腐で時代遅れだというのがだ。もちろん鉤点も、点印も施されていない。とてもほめた批評とはいえない。ほかに、「今少し」「題にかなはず」「解がたし」など、同種の批言があつて、いささか辛口が目立つ。蕪村の点としては、二十五点までもつているにしては、最高で十五点しか与えていないという事実を加味して考えると、全体的に

評価は高いとはいえない。

蕪村の点帖は、これまで十点ほどが知られている。そのうち現存は、断簡を含めて、三点が確認されているのみで、本点はその後に新たに加わったことになる。既存の点帖でも、蕪村の点はけつして甘いとはいえず、この点帖が特段辛いというわけではない。

この催しへの参加者は、地域としては、寺田・淀・宇治田原・深草など、おおむね山城の南部地域の地名があがっている。作者たちの本業や実像はほとんど不詳だが、専門俳人ではなく、素人の俳諧愛好者だったと考えられる。「月並発句合」とあるが、それはかれらにとつての「月並」であつて、蕪村が毎月付き合っていたことを意味するわけではない。もしかれらの歎心を買おうという下心があるならば、点数や評語にもう少し手心を加えるという姿勢もありえた。そうではなくむしろ、蕪村の文学的な誠実さや公正さをしめしたものと理解するのがよい。成立時期をうかがわせる内部徴証はないが、蕪村の手紙に年代を推測させる文面が見える。安永四年閏十二月十四日付の山肆宛の手紙である。

月並発句合愚評、則飛脚へ差遣候。病中ゆへ、僻考の段も御社中へ御伝達可被下候。

もし「月並発句合愚評」が本点帖にあたると仮定すると、事態がややつぶさになってくる。まず宛名である山肆は、淀俳壇の中心的な俳人で、この催しの幹事としてまったくふしぎでない人物である。むろん本人も句を投じているし、泉志や富葉といった淀の有力俳人も参加している。安永四年の蕪村「春興帖」には、山肆はじめ「淀社中」の作者連が顔を列ねており、両者に俳諧的交渉があったことが裏付けられる。

安永四年というと、蕪村が俳諧宗匠になって五年目。当初はいくつかの悪条件が重なって、蕪村の夜半亭は、襲名して間もなく危うい状況に陥ったかにみえたが、安永三年ころから有力な新人の加入があり、また名古屋の暁台を筆頭に、地方俳壇の有力者が接触をはかるなどのことからみて、蕪村の存在感が高まってきたことがみてとれる。この評点依頼も、そうした蕪村の地位を暗示するものと解される。

ただし、蕪村の側に、淀社中もしくは南山城地方のほうへと、勢力拡張しようという意欲はほとんどなかった。絵師を本業とする蕪村にとって、俳壇の野心は無縁のものだった。だからこそ、余念なく、文学的信念を貫いて評点にあたることができたともいえる。俳諧宗匠とはいえ、蕪村のばあい、かなり純文学的な姿勢で、加点という課題にあたったことになる。ここにふ

たつの観点で、蕪村と南山城俳壇との距離を測ることができる。第一点は、蕪村俳諧との距離である。第二点は、俳壇的距離である。時代をぬき込んだ蕪村俳諧の輪のなかに入るのは、なかなか容易なことではなかった。

## 五 伏見の俳壇模様

洛中住まいの蕪村と、近郊にあつてある種の独立性をもつ伏見との間合いは、「中央と地方」といった、直線のかつ単純な構図を想定して済むものではない。元禄期の蕉門と伏見俳壇においても、すでに錯綜したもつれ模様があつたようだ。具体的な事例をあげるのには容易ではないが、資料を丹念に読解することから、浮かび上がってくる一定のものがある。

先に引用した山肆宛書簡の、そのつぎの条項はまた、蕪村のなかの、伏見俳壇に対する意識や関係を測るのに有効である。伏水宗匠家より御頼れの由、愚句加入の事、本望の至に候。則書付進申候。

まずこう述べて、依頼されていた発句をお知らせします、と伝える。追伸にしろされた、「しら梅やいつの頃より垣の外」という句をさしている。問題は以下の文言である。

愚老句御加入被下候とも、京師の宗匠家同列に御加入被下  
義は御容赦願入候。別に御出被下候儀に候は、ずいぶん  
忝存候。

「しら梅や」の句は、伏見の春興帖らしき一書に寄せた自作だ  
が、他の京の俳人と別扱いにしてほしいと要請するとは、どう  
いうことなのか。作品を求められて、それに応じることはして  
も、勝手な扱いはしてもらいたくないと申し入れた。いかなる  
事情、どんな思惑があつたのかわからない。ただ、蕪村じしん  
が、京の他の宗匠連とは「ちがう」という意識をもつていたこ  
とは注目すべきことである。時代のなかで、蕪村俳諧の意味を  
考えさせる一事といえる。

もうひとつ、蕪村と伏見との距離感をうかがわせる師弟関係  
の位相を取り上げたい。

安永六年（一七七七）は、蕪村の生涯でも最高の実りを生ん  
だ年だった。「春風馬堤曲」は、その第一に挙げられるべき作品  
である。

○やぶ入や浪花を出て長柄川

○春風や堤長うして家遠し

この二句に始まり、全十八首、発句あり、漢詩体あり、読み  
下し体あり、自由詩風ありと、さまざまな詩体を織り交ぜて作

られている。日本詩歌の歴史上、類例をみない稀有な作品であ  
る。大坂の町に奉公する少女が敷入りで帰省するさまを歌い上  
げて、その実、作者蕪村の止みがたい郷愁を吐露したものであ  
る。

○むかし／＼しきりにおもふ慈母の恩

慈母の懐抱別に春あり

別天地の春のごとき母の懐に飛び込んで、安らかに憩いたい  
という少女の願いは、蕪村じしんのものであり、また諸人に共  
通のものでもある。私情を奥底に秘めて、少女になり代わって  
詠じるという、巧みな趣向をこらしつつ、一人ひとりの琴線に  
触れる抒情詩となっている。

蕪村は、こうしたねらいと真情を、門人に宛てた手紙でひそ  
かに打ち明けている。安永六年二月二十三日付の柳女・賀瑞宛  
の手紙である。「故園の情に不堪、偶親里に帰省する」田舎娘を  
よんで、「実は愚老懐旧のやるかたなきよりうめき出たる実情に  
て候」と、抑えがたい郷愁の念を伝えている。この手紙はまた、「  
馬堤は毛馬塘也。則余が故園也」と、蕪村の生地を教える唯  
一の根拠となっていることでも知られている。蕪村の伝記を語  
るうえで、重要な基本資料である。

柳女と賀瑞は伏見のひとで、母子で夜半門に加わって俳諧に

遊んだ。じつは、柳女の夫鶴英（賀瑞の父親）は、蕪村が宗匠立机する前後の明和期、蕪村と親しく交わった俳諧の巧者だった。かれが明和八年秋に死去したのち、母子してともに蕪村に入門した。

先の手紙は、『夜半楽』を送呈したときの送り状である。「春風馬埤曲」の真情を報じたあとの文面で、こんなことをもらしている。

当春帳は同盟の社中計にて、他家を交す候。それ故伏水の諸家をももらし申候。御出会之節、其御嘯被成、諸子腹立なき様被仰訳被下候。

『夜半楽』をひもとくと、夜半亭の同盟俳人のみとはいえず、かならずしも他流のひとを完全に除外したわけではない。とはいえ、柳女・賀瑞兩人以外に、伏見の作者が入っていないのは確かだ。誼<sup>よ</sup>みを交わす伏見の俳人は、もちろんほかにもあった。そういうなかで、この母子のみの入集となったのだ。その事情や思惑はわからない。「諸子腹立なき様」によるしく訳を言っほしいと懇請しており、濃やかな気遣いはみせている。それでも、こういう差別ある扱いになった。

伏見俳壇といっても、単純にひと括りにはできない、複雑な色模様があった。また、一口に〈中興俳諧〉といっても、一歩

その時代に足を踏み入れると、モノクロームではなく、さまざまな色合いがあったはずである。それがひとの生きる世間というものだ。

『夜半楽』という一書は、わずか十丁（二十頁）の小冊子だが、そこに盛られた思いは神妙なものが認められる。蕪村の肺肝をしばりだすようにして作られた本である。そういう書物に、だれかれなしの入集とはいかなかったのだろう。この母子に宛てた他の手紙を見ると、たしかにたんなる師弟というにとどまらない、真率の交流があったことがうかがえる。互いに俳諧への志をもちつつ、親密なこころのふれあいを求めていたのだろうか。

でありながら、若干の不審ものこる。師蕪村の出自に関して、この母子はこれまで何ら知らされていなかったらしいことである。おそらく几董や百池といった、ごく少数の側近のみの承知する秘め事だったのだろう。蕪村という存在の謎でもある。

伏見という町は、蕪村の暮らす洛中から眺めて、遠すぎも近すぎもせず、ほどよい距離にあった。この距離感を形成しているのは、空間性による地理的感覚だけでなく、それ以上に、俳諧という文芸をめぐる織りなす、人間らしいこころの多彩な文<sup>あや</sup>であつたにちがいない。

〔注〕

(1) 下村家一族と蕪村門、また下村家の茶事については、拙稿「茶の湯と中興俳諧——変容する文事と茶事」(『江戸文学からの架橋』所収)に詳述した。

(2) 蕪村に「口切や五山衆などほのめきて」という発句がある。明和七年五月十三日付楼川宛の書簡に見えることから、明和六年以前の作と考えられている。本句はまた、『蕪村句集』にも収載されるが、そこではやや長い前書が付される。「几童にいざなはれて、岡崎なる下村氏の別業に遊びて」というものである。この下村氏について、『蕪村全集』第一巻および岩波文庫『蕪村俳句集』では、春坡のことと注されている。だが、そもそも几童は蕪村の門人になる以前のこと、明和六年の時点で、蕪村・几童と春坡に面識があったとは考えがたい。ここでの下村氏は「正巴」に充てるべきかとおもわれるが、それでもなお時期が早すぎて不審がのこる。あるいは、『蕪村句集』を編集した几童の誤認か、さかしらだった可能性もある。なお「注1」参照。

(3) 尾形仿「澱河歌三首」(『蕪村の世界』所収)参照。

(4) 拙稿「蕪村の趣向・草廬の方法」(『蕪村 俳諧遊心』所収)参照。

(5) 別稿「新出・蕪村評点帖——南山城の俳諧と蕪村」(『関大国文学』91号)参照。

(6) 拙著『蕪村』(岩波新書)参照。

〔付記〕

(1) 二〇〇五年十一月十九日、聖母女学院短期大学における連続講座「伏見学講座」で、本稿と同じ題の講話をしました。終了後、同大学教授で高校の同窓久米直明氏より原稿を懇懇されました。「期限はない、いつでもいいよ」という気楽な依頼だったため、うかうかと歳月を過ごしてしまいました。ところがその後、久米氏が急死、今となっては遅きに失したことになりましたが、ユニークで意義深い催しを支え続けた故人の高志に改めて、謹んで本稿を霊前に捧げたいとおもいます。

(2) 右の「付記1」は、久米氏の追悼集をつくるという企画に応じて、二〇〇八年秋に出稿したさいに付したものです。ところが、予期せざる事態のため、企画の頓挫を余儀なくされました。本誌上を借りて、改めて追善の稿とすることをあらかじめお断りください。

(ふじた しんいち／本学教授)